教育改革を実践

1

ここで、時代と社会の変化に先進的な対応を見せる「安城学園教育」の特色にスポットを当ててみたい。

安城学園は、安城市、岡崎市、豊田市という西三河の中枢都市に教育拠点を置き、それらの地域に密着した教育活動を展開している。そこに、西三河地域を代表する私学としての存在感を示すとともに、地域の人々からは「地域の老舗・名門学園」という親しみをこめたイメージを持って、高い声価が得られることになっている。

そのイメージは何から生まれているものだろうか。それは、実に明治末期から一世紀を迎えようとする学園の地域に密着した長い歴史と伝統によってもたらされたものである。

だが、いま学園は、そうした歴史と伝統を基盤としながらもう一度創立時の原点に立ち返って新しい教育改革を推進している。

安城学園は「庶民性」と「先見性」を建学の理念とし、この建学理念を具体的に展開するために、「まちづくりのためのひとづくり」というコンセプトのもと、地域社会で活躍できる人材育成を目指し、

愛知学泉大学・短期大学岡崎キャンパス

企業や行政機関などと研究・連携しながらさまざまな活動を行っている。

それは、〝実学〟の実践でもある。知識・技術を活用し、問題を解決する経験を通して社会人基礎力を育成する実践的な生きた学びの場を提供する―こうした新しい教育への取り組みは企業界、自治体等各方面から注目され、期待されている。

大学卒業生のうち、就職希望者はこの二十年で一・五倍の四十五万人程度にまで増えたという。この就職人口増は必然的に就職難につながり、就職氷河期が長期化すれば大学の淘汰がひき起こされないとも限らない。

今多くの大学が目指すのは「就職に強い大学」と評価されること。これが大学全入時代に生き抜くための一つの手段なのだ。

あえて端的に見るとき、「社会人基礎力育成」は〝就職対策の切り札〟として位置づけられ、いわば「出口戦略」として推進するもののようにも早合点されそうだ。だが、その教育内容をつぶさに見ると、単なる〝就職対策〟だけにとどまらない新しい教育のカタチが見えてくる。

2

今、経済の世界だけでなく政治の世界においても、努力（インプット）だけで評価される時代ではない。きちんと成果（アウトカム）を出して、始めて評価される時代になってきている。そして、このような現代社会に適応して生きていくためには、学校教育が従来力を入れてきた基礎学力と専門的知識・技術を身につけることだけでは不十分である。問題解決能力が求められている現代社会では、具体的な問題を実際的に解決する際に不可欠な行動特性（本学の場合、「社会人基礎力」）も併せ持って身に付けることが求められている。そして、この行動特性は、複数の人間で何らかの問題を解決できたという数々の成功体験を通して始めて身に付いていくものである。即戦力が求められる現代社会では、社会に出る前の学校段階でも様々な機会を設けることが必要である。

学園では、「共通の目標を複数の人間で実現するときに、基礎学力と専門知識・技術とともに不可欠な能力」として「社会人基礎力」を位置付けており、学生たちが〝より良く生きるための行動特性〟を獲得するモデルとして、新しい教育システムを展開・推進しているのである。

単に企業で成功するための手段としての行動特性を獲得させるというのではなく、職場および地域社会でより良く生きるための行動特性なのであり、これほど現代社会に視座を置く教育は少ない。

企業はその現場に活きてくるような教育を求めている。そのため、社会が求める人材として成長

愛知学泉大学豊田キャンパス

させる仕掛けを創る。地元企業でリーダー格で活躍するコア人材の育成を目指す、いや、さらに大きく、いわば〝明日の日本をプロデュースする人材〟の育成を図る…安城学園が描く遠大な青写真がそこにある。

「教育とは、一人ひとりの潜在能力を可能性の限界まで開発することです」

という創立者・寺部だいの教育信条から、大学では、こうした視座に立って、この教育改革を「無限の可能性―潜在能力の発揮」と標榜する。

＊

安城学園の近年の教育活動は目覚しい。特に愛知学泉大学の教育改革は瞠目（どうもく）的である。何がめざましいのか。何をもってめざましいというのか。

3

大学は、ときに外界から隔絶した「ガラパゴス諸島」になぞらえられるが、これからの大学はそうであってはならない。

「生き残る種というのは、最も強いものでもなければ、最も知的なものでもない。最も変化に適応できる種が生き残るのだ」

チャールズ・ダーウィンは『進化論』にかく説く。

「唯一生き残るのは、変化できる者である」と。

このセオリーは教育界にも通ずる哲理だろう。

「時代の変化に敏感に的確に適応していく教育が社会に受け容れられ、それを実践する学校が栄えていく」

教育界も新しい学びの手法によってよりよい明日を築くことができる。

安城学園は今、その道を究めていこうとする中にあり、それが、生き生きとした教育成果をあげている。

安城学園高等学校

それは、ある意味、〝日本を元気にする大学〟の一つになっているのではないだろうか。

＊

現況が導かれる安城学園の教育改革の兆しは〝平成八（一九九六）年〟に起こった。

この時就任した現寺部曉理事長の方針に基づく「学園の在るべき」構想が学園の教育にパラダイム転換を促した。

「不透明な政治・経済状況のなかで、持続的な発展を手に入れるには、民間企業の場合、『（変化に

適応して）ビジネスをマネジメントする』ことが大切だ」

と言われるように、学校教育も同じく「（変化に適応して）教育をマネジメントする」ことが大切なようだ。

それは私学においてこそ実践できる、私学ならではの強みだ。

安城学園では、建学の精神を指針にして教育をマネジメントする実践が果敢に進められた。特にこの数年における変化のインパクトは大きかった。

4

安城学園が今なぜ、社会人基礎力育成を通して、学生・生徒に学力・体力とともに社会に生きていくために必要な適応力―コミュニケーション力の育成に傾注するのか。

寺部理事長は「私たちの仕事はまちづくりのためのひとづくりである」と明言している。その思いの基底には確固とした理念がある。

「教育は常に世界の動向・時代の要請・地域の要求という磁場の中で、理想を失わずにしかも実際的に設計する必要があると思います。そういう意味で、学校法人安城学園は地域とともに生きる学校・地域をともにつくる学校でありたいと考えております。自分の住んでいる、あるいは自分の通っているまちに無関心な教職員の行う教育は、単なる知識と技術の伝達だけに終わってしまい、教育

と言えないと思います。まちをつくることがひとをつくることにつながり、そして、まちをつくることが国をつくること・世界をつくること・地球をつくることにつながるそんな教育に全力を傾注したいと念願しております。」

（「安城学園九十年誌」巻頭挨拶より）

この思いは、学園がこれまでたどってきた道程に基づいて構築されたものだった。

岡崎城西高等学校

創立者・寺部だいが学園の〝定礎〟たる裁縫塾を安城の地に創り、そしてそれを一大学園に発展させた軌跡は、〝官尊民卑〟の中〝独立独歩〟で運営するという私学の宿命を負いながらの闘いでもあった。寺部だいは、一般的な視点で見れば、家族的にも経済的にも〝不遇〟と言える境涯に育った。だからこそ、刻苦精励、自らを〝開発〟、自らを高めていった。

人間として生まれた限り男であれ女であれ、誰でも無限の可能性を持っているという思いから、教育は潜在能力の開発と信じ、また地域のための、地域に生きる教育を目指した。そのＤＮＡが今「私たちの仕事はまちづくりのためのひとづくりである」という〝マニフェスト〟に表れている。

それは安城学園にとって〝こだわり〟といってもいいかも知れない。それが建学の理念「庶民性」と「先見性」の遵守である限り、堅守されるべきものだからである。

そして、学園でいま展開される教育のイノベーションは、創立者・寺部だいの想いと願いを具現化していくものでもあるかもしれない。